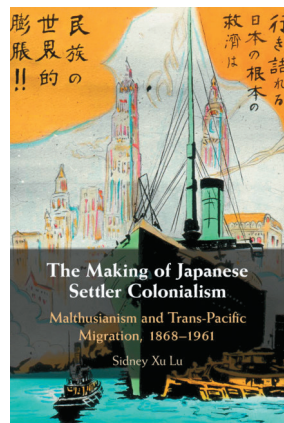


シドニー・ルー

『日本人開拓地の誕生と発展——マルサス主義と太平洋を渡る移民、一八六八年〜一九六一年』

Sidney Xu Lu, *The Making of Japanese Settler Colonialism: Malthusianism and Trans-Pacific Migration, 1868-1961*

細川周平



Cambridge University Press, 2019

一九九二年の新年を、私はブラジルのサンパウロ州奥地アリアンサにある弓場農場で迎えた。大晦日にはピアノのある集会場で小さな歌合戦に興じ、元旦には餅つき大会で賑わった。農場は日本力行会会員、弓場勇の一家が一九二六年、政府の資本で購入された広大な未開地の一角を開墾したことに始まる。戦前戦後、日本人によって計画的に購入された開拓地はブラジルに数カ所あり、当初は日本人組織によって経営されていたが、どこも経営不振や環境不応や排日政策などから移住者は離散し、当初の面影はない。そのなかにあつて、もうすぐ入植百周年を迎える弓場農場は、かつての「日本人村」の様子を留める唯一の場所である。

本書を読んで、単に弓場勇のプロテスタントの開拓精神だけで、この村が開墾されたのではなく、人口問題解決という明治初年以

来の国家プロジェクトのなかで海外移住が発案され、力行会はその最大の代行者のひとつで、彼はたぶん最も忠実な使徒だったことを学んだ。日本人移民は初めから国家主導で実行された。十九世紀初頭より貿易商人の仲介で、版図下の下層労働者として世界各地に送られ、呼び寄せられ、共同体を築いてきた華僑の歴史とはだいぶ違う。

キーワードの「マルサスの拡張主義（マルサス主義）」はこう定義されている。「一方で本国社会にて余剰と指差される人々を調整するために海外の別の土地を要求し、他方でこれと関連して国民全体の人口増加の必要性を強調する思想一式」(p. 2)。国力は人口と比例するという大前提の下、過剰な人口を外へ送り出して国内問題を解決しつつ、国外に植民地を設置して政治的影響下に置く

思想を指す。産業革命（資本主義）と不可分のイギリス型植民地主義の発端に人口問題があり、マルサスは国外への組織的な（軍事力を伴う）移住でそれを解決する政策を正当化した。マルサス主義は社会、制度、国際関係、知性の四つの絡み合った側面を持ち（㉓㉔）、明治日本が植民地化されずに近代化を果たし、文明社会に加わるのに必要な道具一式に含まれていた。福沢諭吉や黒田清隆ら開国時の政治的知識人にとって、文明開化とはマルサス主義を自力で発展させることで、不採用の選択肢はなかった。本書の表紙に選ばれたポスターは、マルサス主義をわずか二十二文字に凝縮している。「行き詰れる日本の根本の救済は民族の世界的膨脹!!」。

これまで主に経済的・社会的な理由から説明されてきた海外移住を人口論から説明しているのは独創的で、行先別に分断されがちだった日本人移住史を「人口、植民、拡張の思想間の関係」（㉕）から一貫して見直した視点は刺激的だ。これまで植民地経営についての論考はかなり蓄積されてきたし、人口圧の解消という植民の動機自体も個別に指摘されてきた。しかしそれに絞った包括的な日本移民史は初めてで、戦前戦後の新大陸移住の政策上の連続性を、満洲国の十五年を間に挟んで精密に解明している。著者によると、マルサス主義は四つの段階を経て適用された。

(1)「発生期（一八六八―一八九四）」は元士族の北海道開拓に始

まる。一八七〇年代、アメリカの西部開拓（先住民の土地の収奪）をモデルに、先住民アイヌの文明化と自然資源開発を口実に、アメリカ型の農業経営が試みられた。しかし「強兵」を期待された士族は農業に不慣れで定着せず、一八八〇年代には事業は政府の手を離れ、私有地として未開地を売却する方針に転換した。「日本のアメリカ」であつたはずの北海道の経験は、「アメリカの日本」としてのカリフォルニア移民計画の青写真となつた。しかし小作人として送られた移民は排日運動に遭つて離農し、帰国か都市部への再移住の道しかなかった。アングロ・アメリカ社会に食い込む文明化の欲求と、受入側の人種差別の現実が摩擦を起こした。並行して、非白人社会が有望な行先とされ、ハワイ、南洋、中南米が浮上した。具体的な事業内容はあいまいだったが、未開人を啓蒙するという文明人意識、自民族優越主義が南進を正当化した。

(2)「転換期（一八九四―一九二四）」はアジア唯一の文明国であるという自負から、膨張主義を政治とイデオロギーの両面で強力に推し進めた時期にあたる。カリフォルニア小作農移住失敗の反省から、日本人経営の大農園が提唱され、その最初のモデルケースがテキサス移民（一九〇四年）だった。平民層（農民）を募集し、日本資本で購入した未墾地で米作を始めたが、現地の労働事情や農業事情と折り合いが悪く、十年足らずで頓挫した。そのため失敗例としてよく挙げられるが、著者はその後のブラジルや満洲計

画の先駆を成す「パラダイム・シフト」(Chap. 4)だったと大きく取り上げている。この時点で「殖民」(民を増やす)は「植民」(民を植える)へと、概念も表記も実践も農へ向けて一新し、国家の介入(ないし補助)がこれまでに以上に制度化された。日本力行会が移民あつせんを開始し、県ごとの移民協会が希望者を集め、海外興業会社のような企業が出国実務を担当するような、上から下への政策実行の組織が整えられた。テキサス計画の背後にあるのは農本主義で、社会主義、民族主義、キリスト教的開拓思想(たとえば日本力行会)も加わって、移民推進の知的な基盤が固められた(pp. 112ff)。移民キャンペーンは一九二〇年代より、日本移民の使用命はアングロ・アメリカの白人優越主義とは違い、「共存共栄」の友好的精神に支えられ、有色人種の指導者たる姿を世界に証明することにであると宣伝した。これは黄禍論に対抗すると同時に、白人優越主義の首を日本人にすげかえただけの擬態でもある。大東亜共栄圏のスローガンは満洲侵攻以前、一九二〇年代にブラジルにて芽生えていたと著者は考えている。なぜ、いかにして。

(3) 「絶頂期(一九二四―一九四五)」には、アメリカ移住の扉が閉められる(一九二四年)のに対応して、当時なお奥地開拓中であったブラジルと利害が一致し、代替地として脚光を浴びた。「海外同胞」という新たな呼び名で本国との強い心情的な絆を主張したが(pp. 229ff)、あまりの距離と綿花の下落と排日運動でブーム

は長続きしなかった。その間に始まったのが、戦争によって事実上支配下においた満洲国への移民で、ついに東京主導の植民地建設の理想を実現した。冒頭で述べたサンパウロ州のアリアンサ(英語の *alliance*、協調、絆の意味)を購入した信濃海外協会は、ブラジルへも満洲へも最大数の移民を送り出した。これには長野県の農業事情が背景にある。力行会は満洲計画に最初から参加すると同時に、フィリピン、ジャワへ五〇〇万人移民計画を発表した(p. 226)。日本型植民地経営と日本型帝国主義は、手に手を取って最大規模に盛り上がった。

(4) 「再生期(一九四五―一九六一)」は海外領地を失った「小さい日本」が、満洲引揚者を再び海外に送り出す時期にあたる。彼らは平和と民主化の恩恵を受けられず、農地改革により故郷の財産を没収されたり、組合法により生活の保障を受けられなかった。つまり「余剰人口」だった。今度は帝国の尖兵ではなく、国際協力する平和の使徒と呼ばれ、日系社会の地盤のあるブラジルが再び大きな受入国に選ばれた。その送り出しの波も国内の労働市場や経済水準が伸びた高度成長期にはしほみ、一世紀に及ぶマルサス主義的な拡張の時代は終わった。

この歴史区分に沿って、著者は一貫して四つのテーマに焦点を当てている(pp. 264ff)。第一に、一世紀にわたってマルサス主義が多次元的に継続してきたこと。植民による余剰人口の軽減とい

う原理は、一度も疑問視されなかつたし、それは政策提唱から世論形成まで多くのかたちで表明された。第二に、各段階における移民送り出しキャンペーンの人間関係や制度が断絶せず継続してきたこと。明治初頭の開化論者や北海道開拓使の官僚から、転換期の農学者や社会主義者や国粹主義者、移民事業者を経て、戦後の外務省の政策決定者まで、本書は人脈を重く見ている。第三に、日本と受入国の間のイデオロギー的な相互作用が表面は変わりつつ、内実において一貫してきたこと。それを支えたのは、国家間の政治的力関係を人口問題に帰着させる言論で、大きくいつて、文明開化、富国強兵から共存共栄、国際協力へスローガンを代えながら、白人優越主義に服従・対抗し、有色人種のなかでの優越を主張した。第四に、植民と拡張主義が知的融和を遂げてきたこと。両者のアマルガムは十八世紀のアングロ・アメリカがその最初の範を示したが、ペリー来航以来、合衆国の政治経済と文化に影響を受けてきた近代日本は、自民族優越思想を含めてそれを採用し、新大陸の開拓移民国家や植民地へ拡張した。そのため白人国家の排撃を受け、満洲で理想的な開拓をいったんは実現しかけたが、それを可能にした強圧的な軍事支配は十五年で崩れた。

本書は誰が余剰なのかという日本側の事情と、誰を必要とするのかという受入側の事情をバランスよく観察している。一貫して政策実行者と知識人の言説を論じているが、すぐさま植民地主義

イデオロギー批判に走るのではなく、人口問題という一点から植民という資本主義と不可分な構造を問題視し、発言の文脈を現実にも照らし合わせている。これは本書の優れた点だが、丁寧に論じるあまり冗長な部分もある。その代わりに、国内の人口条件（増加と都市集中化だけでなく、社会学者や政治家の介入やジャーナリズムの宣伝）にも少し触れたほうが、日本史を専門としない読者には親切だったかもしれない。女性の存在にも注意を払い、優生法と拡張主義の間の本質的な矛盾と現実について述べているのは、最近の社会史の業績を消化していて、新しい発見が多い（pp. 63ff.）。ただし単身（男性）移民の募集から家族移民の募集へとという流れの分析は他よりも弱く、今後の検討が望まれる。

海外移住の明るいスローガンを必ずしもすべての移住者が真に受けたわけではないし、それを信じた者も悲惨な現実と直面した（p. 273）。その負の歴史はぜひぶん書かれてきた。弓場家のように初志貫徹した者は例外中の例外に属す。マクロな現象と言説に翻弄されるミクロな存在としての個人。両方を合流させる万能の処方箋はないとしても、何かつなぐ道は歴史学にもないものか。誰も自分を余剰人口であるとは自覚していない。ミクロなブラジル移民史を追ってきた者の素朴な感想である。

マルサス主義が退いて半世紀、今日、日本の人口問題とは総人口の減少を指している。労働力不足を外国の余剰人口の一時滞在

によつて埋める政府レベルの計画が議論されている。一九八〇年代に始まる企業（と市町村）主体の「出稼ぎ」雇用とは様相が異なる。そのなかに、日本の高い技術力を発展途上国に教えるための「研修」を口実とする論もあり、「国際協力」や「共存共栄」の言を時々読む。それが歴史的な用語であることを今回教わつた。昔は文明国、今は先進国。呼び名は変わつても優越国意識は変わらない。受入国側に回つて、歴史は繰り返しているようだ。世界の人口増は続いており、資本主義が続く限り国家間の経済格差と労働力の不均衡は必須で、労働力の移動は止まらない。本書は近代日本を人口問題と移民政策の二点から描いた。どちらかの話題に関心を持つ読者は、必ずや他方へ興味を拡げるだろう。